

全国各地で獣害が発生している。今までのように山村など民家の少ない限定された地域だけでなく市街地にも出没して、町の中でのサルやインシシ、クマなどの野生動物捕獲劇が新聞、テレビで報じられている。宮古市田老地区のある民家では、ツキノワグマが入り込み、仏壇に供えてあったまんじゅうを食べていたという。

このような獣害の対策として捕獲された野生動物のほとんどはハンターによって射殺されている。ツキノワグマは年間に5000頭以上が射殺されているという。それでも被害が減らないためハンターの増員が叫ばれているが、ハンターの増員による駆除は安直な発想である。現に今よりハンターの数が少なかった昭和30年代前半でも、獣害被害は軽微なものであった。

◆ ◆ ◆
この獣害の根本は、戦後間もなく行われた「拡大造林」と呼ばれる森林政策に起因している。これは広葉樹林を針葉樹に植え替え、用材に適した木材生産を行うための森林政策であった。その面積は日本国内の森林面積の40%を占める1000万杉にも及んだ。

しかし、木材の輸入自由化で対外競争力に負けた国産材は伐採して販売しても赤字になり、針葉樹林が放置されたのである。放置された針葉樹林は、間伐や枝打ちが行われないため林床に太陽光線が届かなくなり、下草と呼ばれる多様な植物や広葉樹などが駆逐される。針葉樹の

森林政策改める契機に

みの単層的植生となって、ドングリやクルミ、クリといった木の美、ノイチゴ、ヤマブドウなどの野生動物の餌が激減した。

その一方、民家に近い里山は昭和30年当初から始まった「燃料革命」と言われた化石燃料の急激な普及により、薪炭林の役目を剝奪された。野生動物と人間の共存していた里山が放置され、やぶ化して、餌の少なくなった奥山から追い出された野生動物の格好のすみかとなったのである。

◆ ◆ ◆
里山の近くには田畑があり、稲やトウモロコシなどの農作物、リンゴや柿などの果物がたわわに実っている。また、無造作に食品の残りが捨てられている所もある。それらは野生動物にとっては、この上ない餌である。このように獣害の基本的問題は人間側にあるといは言えまない。

◆ ◆ ◆
森林保全は獣害問題解決の鍵であるだけに、地球温暖化の原因となつている二酸化炭素対策、水源保持、緑のダムとしての効用、そして田畑を潤し豊穰(ほうじょう)の海を守るなど、地球環境の基本である。人間のみなならず全ての動植物が生きる上での源泉となつている。

◆ ◆ ◆
このように森林問題は、国策による対応が欠かせないのである。工業大国として知られるドイツの森林面積は日本の約40%の1000万杉しかないにもかかわらず、木材関連産業の従事者は100万人で自動車産業の77万人を大きく上回っているという。いち早く原発ゼロ宣言をし、環境問題を重視しているドイツという国の方針が明確に表れている数字と言えるのではないだろうか。

◆ ◆ ◆
片や倍以上の森林面積を有するわが国の林業従事者はたったの5万人余りであり、そのほとんどが60歳以上の高齢者である。獣害問題を契機に日本の森林政策を改めなければ、後世に禍根を残すことは間違いない。

(投稿)

獣害を考える

酪農家

中河 正

(61歳・岩手県岩泉町)

